遠島二百首

87
170
1

[illegible]

杜若

[illegible]風の池水惜しき流の上小舟[illegible]

[illegible]

藤

[illegible]

歌

[illegible]

[illegible]

三月盡

[illegible]

夏

更衣

けふまて馴志たりし袖の香にほなく惜き衣かへかな

卯花

月白う見えつれはかきねの外は橘は盛の卯花

葵

葵草の葉その色は神山の葵の祭日の思ひけり

郭公

思ふかたや卯月の末の不尽思ひてふ古里の声

詞海神妙人

藤原清ー

夏の池の汀やおちこちの風吹毎に涼しけれ之

早苗

平田

早苗とる伏見の里に雨過て向の山に雲そかゝれる

此頃の山は雨に侯まれ見えて詠みける人ぞ

誰しも不知 不審なる極人

照射

やかしする端山の末に立鹿は今宵の比に不鹿れさる

五月雨

飛鳥川淵は瀬となる五月雨の雲の隔て見えぬ

蘆橋

五月雨を軒の橘香に匂ふ昔の袖の香そする

螢

夏の夜ハ我すゞしきれハきり火の星見とやす飛螢ハ

蚊遣火

夜るもとて世屋に人の蚊まよふの煙ニむせふ枕

蓮

風吹ハ池に乱る蓮葉の露かゝるさゝめ見

氷室

夏も猶とけん影りもしき氷室山いつも流る音の水

泉

秋やとき月やすむらし泉ニ影やとりそ人のかくれ家

六月祓

ゆふ暮の秋風にても吾祢しれ祓涼しき河社かな

秋

立秋

小篠原風やうち吹足引の深山すそ野に秋は来にけり

七夕

秋にもなれ天の河原に立流の初尾の衣にけさ星合哉

待請人

萩の花うつろふ庭の秋風に下葉まちて露は散つゝ

女郎花

女郎花枝もたわゝに籬の秋の色ハ花の女郎の露をうつろふ

薄

すき間なく秋の野風のうちしめりて雪の形はなき

荊豊

風や吉野なへいろ〻に立ちまつ花の方

蘭

露ばかりきあてこぬ袖にしなとなる秋風まくて誰小萩

萩

又さそはれぬ萩と吹風の月と花とをうらやむ

早鳥

花想て今を盛りの初尾の山の松蔭の上

鹿

ふもとの暮やてる鹿の形ちうの月と鳴く

雁

なつかしき人の相模の雁の鳴り今は山の梅月

露

ひとめさの袖に風をとして月落さ雨は立かい

樓

今朝の風ふりうの樓の祀ふと見は秋の雨

馬迎

相坂や行樓のあつさうて馬引人ぞうるる

月

秋の月夜深よりり山高と月とうなる乳

搗衣

[illegible]

[illegible]

秋やまのふるえの古き枕の下に鳴うを

菊

詠歌ふるうるしと初霜の[illegible]ふとけるの面あるを

紅葉

わくらはの[illegible]紅葉めてこきまぜの面あるうるん

九月晦

[illegible]

冬

初冬

紅葉[illegible]

[illegible]

呉竹の緑をはつかくれを時雨降りて籠はら

霜

龍田山木の葉しぐるる小夜ふけて中宵を[illegible]霜

霰

わすれてはあるとそれ[illegible]の[illegible]そ見ふとりの柏の葉

見えとこうの面[illegible]の[illegible]讀ん面ない

雪

高野山[illegible]侍宮や[illegible]

[illegible]

藻汐やく須磨の浦葉にのこる霜まてよの[illegible]

千鳥

夕暮そすこし空に鳴千鳥いつくともなき海辺の袖ぬらす

氷

山の井のしみいりけりな山や深さ氷は月の影さへ[illegible]

貫之か勝手

水鳥

鴛鴦の羽のしもよ越の白浜の波ハ玉藻の床となりて

網代

網代木やよらん木の葉のよとみ迄ハ都の興[illegible]

二しなえよう普通の能有[illegible]

神楽

榊葉や千早ふる人の袖の上に神世とみえて[illegible]の風

鷹狩

み[illegible]里や枯葉の末も雪けて鳥立の原よ鷹なき人

炭竈

炭竈のけむりとは見えし大原や煙とそれ炭竈[illegible]

けふよりは西の方はなにもありけりとよ[illegible]

爐火

烏羽玉の夜半に客のきくほとは灰の[illegible]

歳暮

みなしも年を重ね[illegible]

寒

初寒

思ひもあへぬ木葉の中に初時雨立ちぬとよりも見

冬恋

四ゝ枯れ枯れ山のゆきそめし人を待つ夜ぞ

不逢恋

あさぢふの小野のゆきしいもせの中の山の端遠

初逢恋

彩花ちりとしも無きあふ坂の関の三つ人

疎恋

日数ゆく四方の神の初横雲のうら

あひとあひ人を待つ夜は偽の人

逢不逢恋

月まつ人の形のやうに神の人

旅恋

物思ふ人の海に出でぬ海ぬ

思恋

久方の光の宮の三つ屋に昔なつかし神ぞ

行恋

伊勢の海やみなの海の世間の人の生る命

恨恋

祈りてあり神のみまへに昔の生の

雜

曉

あまの海の波のあなたよりてらす朝日の影ぞ明しき

松

いにしへの春のかゝ松秋と色て風吹ぬれば色かはりけり

竹

くれ竹の節ふしの間もあらしの風ぞ音ばかりする

苔

昔誰住ぬ人の柴の戸にさゝぬ苔のみ生そはてぬる

石床

むすぶ桃林鳥獨啼

洞

桃李不言春煙霞自成蹊

[illegible]

[illegible]

鶴

あしたの鶴の如く霜や雪にさゝ野の井はらみてゝ

山

さゝ分よりつゝじの花はなをみてれ秋風の

河

駒とゝめひの角よりなすへ都迄きわさ風吹

野

武蔵野や山の端りかさ月とみてと秋の花しを

月

御風小次郎の月とや[illegible]

橋
たゝ雨の夜のさきのいかにもしらすゆくゑハ夢のうき橋

海路
かさゆひの鴎立隠す夕霧に浜ゆ代されつゝ漕出し小船

椛
けふみれはしけきまさ萩の葉ちりやしぬらん秋の嵐

別
朝露に消る人の涙とハ門出の空に別れしもかな

山家
夕霧を軒ちかく山の松風誰とはむへハ松ならて

因縁

いかにして別離人の庵に嵐や月とはかなの旅の袖

懐旧
秋の色は送りけるか雲の上にかはらぬ月に梅そなれ
有情ハまことにハ不定をなけくつれなき

月は思ふ人梅の夜まつハすまぬ世哉

夢
うたゝねの空は夢のわかれこそうつゝと成袖の上に

無常
春の花秋の紅葉の露のまに世をまかりける人の哀さよ

述懐
…くもりなき世の中久堅の空に月をなかめ…

[illegible]
家隆卿 定家卿詠 [illegible]
[illegible] 始終詞 [illegible] 奇 [illegible] 裏書 祖父
京極中納言入道 定家卿法名静真 [illegible]
寛禄二年 九月十日写
寛暦二年 正月廿三日書 [illegible]
永和四年 [illegible] 廿一日書 [illegible]
書 [illegible]
[illegible]

至徳三年三月廿日書 [illegible] 御本
書写 [illegible] 書 [illegible]
書 [illegible] 正和 [illegible] 可校合者也
河内入道前[illegible]

文安六年 [illegible] 九条殿御本 [illegible] 書写
[illegible] 御本 寛正三年 七月廿日書
遍修行者 [illegible]

壬辰百首丁酉妹遣明静許へ又進遠嶋了

墨點 法皇後鳥羽院 朱點 定家禅門

順徳院御百首

春

世の中の氷けさはうちとけてかはされ鳴のなれ

風渡池氷とけて鳴かはとる 首尾

相叶 詞姿克調候歟

乱の間ぞらんの北ふく風も雪気よはすまの気

朝陽雖属晴暁風猶吹雪也尤宜候

続拾遺 春白ぬも大原ま人

淡てけり松の梢をの源あれは雪間すさきて若菜

枯葉の桜はらけて雪間の草は遠くみゆるに

新撰 漢草ハ下小埋て春氣あるよふうに見て幽情候らん

柳はみな月のかたのみすまぬ春の雨の眼となるらん

月のおもかげかはろて夜のまりをちや文

美うるに春あけの玉章のはまたしく梅の枝

殊屬未卷羅帶梅氣求降枕席

其以歌其詞華麗候

主の言にやきぬ柳風吹はねる枝ははれ白流

此首二句時節不定始末混乱也

遇題草ま人

淡緑みすみの衣吹風そかへりもやせぬ柳

霞衣風に乱て柳の糸はくれなゐ
ふかし清水や中島に残る花の
宿り鶯の如雲鳥の綾をまとひ詞の林
幽鶯うつるや枝ごとに野辺の春の色深行
萩の上露ふるまで深の野べと深山木末請
繰返し
秋の世ふるゆふ間は色味無桜
生間森の秋哀清流都を去るまくまで
繰返し
満てゝと春暮ぬれて驚愚眼感情
繰返し
花鳥風月ものもうらうら霞てゝ
鶯花の櫻岡錦舗の心河ゝ流れの

繰返し
京東海霞の出越見不惰り名
雪七の三布曲のひるて淀て青葉を花の下の
繰返し
雪と布曲の淀まる葉う花の下るゆ
曲ふ雪の陰とおきませてゆきて曲の流の白い
雪は櫻ときませてゆきて曲の流の白系面形
えんよ見不曲く後
ひとゆの春の美の花は曲て
須臾春中小用庭花又一せの何と夢紅葉
黄落く悲思ひ庭て深湯青袖書深改
春らゝ花ゝ行ゝ花ゝ曲ゝ情ゝ鶯の都
かゝ撲よ やまゝふ来ゝ
ゝらけゝは後ゝて

三代集の上の巻を俤物と詠ずべきなり

ちくま川春の水はまだ清てまだ日の目も見ぬ

雪の師清瀧のとうとさ也

春の水はまだ清てまだ日の目も見ぬ

深山のよけれと事と詠し　不仕人面白

何鴨の羽の色のもゆる

春山の青字形にて紅躑躅の色の花に閉じ

対深山所

何人か水とやのうすの葉の尾きの人の歌の花

紅葉のうすき色古来歌人は皆

[illegible]

名所　造風情婚葉人如此事　妹和歌　今情

鳴やうぐひす思人　梅の喩を鳥つかはしたる

又三月晦日の詩

夏

山路の常盤の森の森の色そ下もみつる夏の時

[illegible]

詩　松尾山の巻　[illegible]

は初の字三文と説他門説頗相異　今度

おなじ日面目

夏の日の本向りの歌　逢の新　松の一入

風情又異國にも絡句其源遠自遠意近年鐘鈥
其細同志人友人杖存候
（傳授標）今出入やいれ許り郭公も鳴の月ハ色毎九
景氣又如當眼路人
今月毎の戸井にたゝきさしてこそ月の桂の影すむ
夷霧雨ゝ晴ても暮ぬ桂月ゝ清謹盛詞高典雅宰
内でもまハ通風軒に桂ホ宿ゐ内よう此廿ハ桂冠
今月雨ホやみ軒ハ森の注連縄もよ梅のかほり
（傳授標）山ふかハ月に注連繩してかくて付てハ又様云人
巖乃松入日すゝしき山陰の嶺の當よ当る影ある
今見の出に野のやま雨見て歌あさしてよ氣又 儒

（傳授）よりまんでも相ハ昭らかに二村己人家のこゝろ
今句卅一字悪兵逃寄如欄玉ん明照遍躍其誤人
數寄人人煙ハ人の志継廷て其心ハ夜の帰の月
煙ハ人の志を継し文引造珠筆
めつきれハ都の鳥ハ我ありやなしやと
鳴の許ホ我をまつ日又さしてよりくるれ姑人
又引すこそ乎凡ひく山の春ハ梅の種し開くるを
春霞月すこて平鳥請千時仍春梅鳥 儒
其異色ハ種石代也可致歟
限あ連ハ異氣又深雪のや山ホ霞む氷室の山の志之
異乃深雪消ちホ消ハ氷室風情又日異國

おもふ人やさかすもしろ風に一葉つゝ落る玉結柳

玉結柳　五ヶ調載せん為に註

見る人やさかさんとて山風に枝をなびかす玉の緒

山嵐やふかさんとて木の葉枝ちらし雲鶴の如眼是候

今来する河波ゆくやそてたかの枝より日くらしの声

此姿又同じ事なり

秋

露やあき秋のきぬ年のはじめ旅ゆく千原の松山

末の松山年次の越行の文字さき物見新数調

波分の流れさすき妻あめ錦とうに見立る

妻かうしの見立の花枝

秋風や手をとけはかなん花用うす城野の末

宮城野の原の末の花乱れ一つ景気又は美麗

千本の詞　花思意御な旨候

今はよしあやまちやさきに今これに三鳥の秋の名

此世一字毎字花柳感深く玄々玄一上久也

所木あまき山人ぞ海の都り月まてとるし秋の言風

山雁海路識こ霞ゆえん西秋は林優艶候

作心面白き野の浅茅と秋ともし海の秋の拝へ

上下句相対婚来の詞相応してた

秋風の枝吹おつ木間より月のゆるる山の端入月

哥詞海ここふ比の京菊かかく流いすてく給ふ

行なれもしくはへ
嵐ふみれしくやみよえし秋の夜の月
こもれしくやよくるて晴間の月深ますあるかは
又深き所へ
月かよふ軒端の萩の音せぬは露ふかき秋の夜すがら
軒ばの萩よりよはるゝ月影も秋の露に消えなんとする
つゆ上陽宮の床の昔の事まで思ひ出し
后の宮の鳥にそへてこそ親神をしのぶ萩の上風
ある山の霧の時雨にあへて同じき神の身には萩の
上葉の風のおとや深からん松虫の声もしのばしく
鳥の下にはしも秋の寒き霧のなかに涙に
遠き鳥の尾上の風の恨は秋の寒き霧に宿る言の
よせことかりはかくよろしう思ひやるべし
猶の籬の鶴の行の長さに秋をさそふ秋の月
籬の行の長き秋に秋の霧れとさ余るなる
只所ふ深きも君が代の同じさまにや
山里の軒端の松も吹はかはる鹿の声すら秋風そよぐ
かこ川のなき野原の霧し重の雨に現はれよ秋の夕暮
野原の霧し行宮の月を思ひ出るもまたき
松虫の風は秋の恨て身にすゞろにしみ入る
続後拾遺
秋しのぶよるの雨のやるらむし
行きたる軒の秋風夜すがらいざきこゆ松の夜月やみやま

うつりゆく山の嵐の木のはなれ一かたならぬ積れ
音羽山おのへの鹿の妹こひて鳴やなく住とぞ見ん
續古今
暮ぬれは月のさやけき稲妻は紅葉ぬらん
風にはらはれ行まゝに時雨もふる青き木の葉の
一夏そめし紅葉の秋のくれゝて時雨て秋風吹
昔は今一たひの村雨にもぬるゝ秋の時雨ふり散て手をへし人
紅葉の首頭華加え秋景氣銀所毎枚催感興人
来年の秋の別かくとなりて後に霜のまゆふくれ
人の相續毎字殊勝

冬

かはなの花ちりむかきてかつ散にこそ見し所かな
櫻色の花の頃は今年より紅葉のせき思ひ
花や咲かんと作らし
鐘の声は霜さえわたりはるゝや夢さへ遠き山おろし
晝夜之鐘動霜閑遅之露為氷寒矣之量趣又
風蕩意深所以
冬来てし枯はわたるや庭の菊移ろふも空月の風
續拾遺
三室山紅嵐之粉寝覚之色又見霧催
秋の時雨にうつろふて霜まよふ木の下の中に
時雨の木の葉ちりつゝ深く下にぬれてわかれし
吹風にまずこゑ道によるらし皆
吹とめ風の氣もおもひ来る
霜枯の里野の宿

時霜枯の野原風は聲ばかり
清人の面白しぬるゝ波の上ふる月の面なりしまるゝ
清人て面白きすまを海て千鳥の月ふけ
朝討面白きうの面れうひてん
今宵ありあけの月の面白きうの月の
きりぎりすの陰ふ鈴のもと衣
きりぎりすや秋らん
河の葉ふ見えてすまの橋すみうれて秋を
暮の葉ふ見て宿を題ふ秋古き事を面
てや侍らし
心とうへ義時くく隆の字鳥羽まの橋
霞吹梭隆の上行河の紅葉見て思ひて
物とて志河ゆ八橋の
い橋ふて詠ふ古哥ふ詠未侍
近年白しまを調ふ
初字毎人毎哥詠侍
ゆき帰ふ君の面れたし
量氣ふ硯形清勝
甲斐の孫心平て宇津山て
宇のまとふ孫毎心の
と同れうき
命ふ毎月まふ人の沒

野中の松は雨露の恵み深く
あをさす月も今はかの神の宮居に
見る殿の歸千歳の松の句を其奥に
置きては春の隣とよりも北野の梅の花の下風
置くもの末の隣 請はし人多く風情を盡くしく
宴
こけ山に深く入てうこかぬ心ならぬ瀧第の家の花は
いつくせむ窓にうつるも籬垣の間に花の蕾に人のかよひ
うはまきれくときつけと雪ふみ分て来りわたる
ひるは人あれと心焉の契らぬ花田にみなしてわたる
四月二日彼岸記 未靡候
偽りの世のいつくせむ契らで四の人の家の
はうれの掾群冢上人
ちかきつれ人とみなうらなかのは心の浦は神のまもりとも
みなみの金をみつ心のうらに神樂
為てし二ねのあれ浦は蠟燈の花をさかせん人もよに
二ねの浦人煙又同家の無度帝家道無念
烏羽はあのかるき花の句つるさきもの人の家の花
晨鶏無鳴征頻割いきて別れ暁の嵐のしらせん
鸚鵡天飛鳥も文字は雲のさきのみまかせて
柳色海より出て孤らむ薄暮の心地とせよ深谷
年中みちにし家中の花に松堪

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いたて船底風おくれ角帆上げ
みちの国すのいてかた
上風乃まて可為ゆくん
帰ちしまのかいろ
又上句はるはるはるん
みるやす浦の玉海に白波
白波乃浦とあるかて心盛とまれと
南風詞乃名て
うきの神やはるの海
又上句伏勝鉛肝
社風の仲きうぬすうれ
雲文菖の葉小夜
あるとの人乃命はらりと
字義ふと
清土衡平欲等友不
故人恵洞琴
書れまとのひ
事理格
光千代乃新七
丁間歳鐘
寛元二年桜月十三日桃燈一夜駅
和哥乃浦に鶴舞

善鶴入聲及[illegible]

[illegible]和尊[illegible]

[illegible]

此遠鳴三百有餘兩本有依為秘物九条殿
御存生之間有雖無被出殿中於御他界之
以後　南都大乗院　[illegible]大僧正御房　[illegible]　被
[illegible]下祐鳴昌[illegible]　同以其御本令書鳴者也

[illegible]

文安六年七月九日

以彼本寶德三年十月廿一日書之畢